

タイトル	資料紹介 トロント大学「マクルーハン文庫」一見
著者	柴田，崇；SHIBATA, Takashi
引用	北海学園大学人文論集(58)： 73-93
発行日	2015-03-31

資料紹介 トロント大学「マクルーハン文庫」一見

柴 田 崇

はじめに

顕著な業績を遺した人物に関する資料の管理は、知の伝達の観点から必須の作業である。その人物が大学人である場合、通常、その業績が生まれた大学が資料の管理にあたるのが最も適切だろう。というのも、学問的業績は、当該人物の個人的な資質にのみ帰属できる性質のものではないからである。

自然科学の研究者が潤沢な研究費や優秀なスタッフを求めて所属を変えるのは珍しくない。人文、社会科学にあっても、所属する機関の知的雰囲気やそこを起点に広がる人的つながりなど、個人を取り巻く事物が研究の質や量、方向にまで影響を与えることは容易に推測できるし、思想史の研究に従事する者ならばその具体的例を挙げることも難しくない¹。

研究の価値は、人文、社会科学の領域では特に、いわゆる時代や文化に加え、成果を上げた人物が長く、濃密な時間を過ごした環境を抜きに評定できない。真に孤独な思索者ならばその思想の価値は孤独な環境を前提に解釈されるべきだろう。大学人であれば、通常、その成果を上げた時期に所属していた大学がここで言う環境に該当する。ある人物の生涯にわたる研究成果を評価するときには、当然、生涯にわたって所属した複数の環境を前提にする必要がある。

大学を差異化する際、固有の雰囲気が「学風」として語られることがある。沿革、立地、教員や学生の気質から経営方針、大学間の序列、卒業生

¹ E.g. 柴田 (2012: 15-16)

の社会的評価など、様々な要因によって「学風」なるものが構成される。もとより、「学風」は不変ではない。一学派を形成した人物の出入りや校舎の移転によっても「学風」は容易に変わりうる。しかし逆に、例えば、講座をはじめとする研究、教育体制の維持は人事異動の中でも大学や学部理念を保存する手段として、立地や建物を含む学舎の配置はその大学らしい景観を保持する装置として機能し、「学風」の保持に貢献している。「学風」とステレオタイプの境界が曖昧なのは認めるとしても、大学には(没個性も含め)「学風」と呼ぶべき個性があることは経験的に認められるし、それを保存、保持するいくつかの仕掛けの存在を名指すこともできる。

知の伝達には、資料の管理に相応しい機関がその任にあたり、かつ当該資料が閲覧を希望する者に開かれていることを要する。保存された資料は閲覧者の資質に応じてその価値を開示するだろう。そのとき、当該資料が誕生した頃の「学風」の名残は、他の資料によって再現された時代や文化という要素と相俟って解釈の文脈を形成し、資料の理解に貢献するはずである。

メディア研究の始祖とされるM・マクルーハン (Marshall McLuhan, 1911-1980)の業績の帰属を考えるならば、カナダのトロント大学を措いて他にない。マクルーハンの個人史を繙けば、工学から文学に転向し、修士号取得まで在籍したマニトバ大学、英文学研究者の資格を授与されたケンブリッジ大学のトリニティー・ホール、最初に教壇に立ったウィスコンシン大学、後に盟友となるオング (Walter J. Ong, 1912-2003) と出会い、その指導にあたったセントルイス大学、ケンブリッジで学位を取得した直後に赴任したアサンプション大学など、様々な「学風」が、その思想形成に寄与したことは推して測れる。マクルーハンを専ら英米文学者として評価するなら、現地で師事した教師や学友、当時流行した思潮を含むケンブリッジが醸す知的雰囲気が主たる文脈になるだろう。しかし、メディア研究者のマクルーハンについては、文学研究から決別して以後²、そのキャリ

² Cf. 柴田 (2013b: 1-18)

アの終焉に至る 30 余年を包摂するトロント大学が主な文脈になるべきである。

イニス（Harold A. Innis, 1894-1952）やハヴロック（Eric Havelock, 1903-1988）のいたトロント大学の「学風」は、新任教員だったマクルーハンに多大な影響を与えただろう。実際、往事の「学風」から読み解けるマクルーハンの思想的特徴は少なくない³。同時に、馬具倉庫を改造した二階建ての小さな建物（コーチハウス）から「旋風」を巻き起こしたマクルーハンによってトロント大学に新たな「学風」が吹き込まれたことも忘れてはならない。マクルーハンの学徒ならば、マクルーハンが思想形成した過程を追跡するための手がかりだけでなく、「マクルーハン旋風」の余波をも看取しなければなるまい。

2014 年 6 月、「平成 26 年度北海学園学術研究助成金・共同研究(代表者：テレント・アイトル人文学部教授)」によりトロント訪問が実現した。マクルーハン研究者を名乗る筆者にとって遅ればせの「マクルーハン詣」となった。移動時間を除くと 5 日半の短期間ではあったが、相応の成果が上がったものと自負する。成果の中には、写真でしか知らなかったコーチハウスを眺め、セントマイケルズ・カレッジを始めとするマクルーハンに縁の深い景観の中を歩いた体験が含まれる。残念ながら、今回はマクルーハンの衣鉢を継ぐ人と会う機会はなかった。「学風」を語るには乏しい経験と言わなければならないが、その一端に触れたことは間違いない。次回以降の訪問と今後の精読を経た資料紹介を前提に、本稿では、まず、「マクルーハン文庫」の概要について説明し、「マクルーハン文庫」と総称できる二つのアーカイヴが所蔵する資料のうち、今回の訪問で入手できたものの一部を順に紹介したい。

³ Cf. 柴田 (2013b: 45-50)

1. 「マクルーハン文庫」

キングス・カレッジ創設の1827年を嚆矢とするトロント大学は、トロント市内の「セントジョージ」、ミシソーガの「東部」、スカーバラの「西部」の三つのキャンパスを擁し、メインキャンパスのセントジョージにある三つのユニヴァーシティーを中心に十数のカレッジと研究所から編成された総合大学である。マクルーハンが着任したセントマイケルズ・カレッジも数ある教会派カレッジの一つである。現在、約7万人の学部生、約1万7千人の大学院生、約2万人の教職員が在籍し、カナダのみならず北米有数の規模を誇る。複数の世界大学ランキングで常に20位前後に格付けされ、特に再生医療の分野では最先端を走る研究機関として世界的に認知されている。学部制とカレッジ制が並存するユニークな学制は大学の沿革を反映するものであり、キングス・カレッジを中心に形成されてきたセントジョージ・キャンパスには様々な時代様式の校舎が点在し、新設大学にはない歴史と伝統が息づいている。

トロント大学には50を超える大小の図書館⁴がある。正式に「マクルーハン文庫」を称する図書施設は存在しないが、セントマイケルズ・カレッジに付属するジョン・ケリー図書館(John M. Kelly Library⁵:以下、ケリー文庫)と、本部図書館(Roberts Library)に併設されたトーマス・フィッシャー希少文庫(Thomas Fisher Rare Book Library⁶:以下、フィッシャー文庫)の二箇所が、「マクルーハン文庫」と呼ぶに相応しい内実を備えている。

ケリー文庫には、マクルーハン生誕100年、および没後30年を記念して2010年に同館内に正式に設置された「マーシャル・マクルーハン・コレク

⁴ <http://onesearch.library.utoronto.ca/libraries/>(2015年2月1日取得)

⁵ <http://stmikes.utoronto.ca/kelly/>(2015年2月1日取得)

⁶ <http://fisher.library.utoronto.ca/>(2015年2月1日取得)

ション Marshall McLuhan Collection：以下、MMC」がある⁷。MMC は、マクルーハンの助手を務めたフィーリー（James Feeley）が2008年に同館に寄贈したマクルーハン関連の資料を基礎に創設されたものである。これに対し、フィッシャー文庫の「マーシャル・マクルーハン・ライブラリー・コレクション Marshall McLuhan Library Collection：以下、MMLC」には、マクルーハンが所蔵していた約6,000冊の図書の他、手稿、メモ、手紙などがある⁸。MMLC 所蔵の資料については、ネット上でそのリストを閲覧できる⁹。

主にマクルーハン自身による著作を集めた MMC の特長は、現在では入手困難な著作の現物が閲覧できるところにある。マクルーハンのほぼ全ての著作が揃う MMC では、内容を確認しながらその研究テーマの変遷を切れ目なくたどれる。他方、マクルーハンの蔵書を集めた MMLC には、マクルーハンがその著作で引用したり批判した作品はもとより、ついに文献表にさえ登場しなかった作品まで揃う点に強みがある。MMLC では、マクルーハンの思想形成に影響したと推定できる資料が、時として書き込みとともに閲覧できるのである。

マクルーハンに関する資料は、著書を中心に同大の他の図書館にも配架されているが、以上の点で、MMC と MMLC のみが名実とともに「マクルーハン文庫」と呼ぶに値する。こうしてマクルーハンの資料は、二つの相補的な「マクルーハン文庫」で管理、公開されている。

今回、両文庫を利用した際の手続きを参考までに記しておこう。同大の身分証を持たない者が同大付属の図書館を利用するには、まず本部図書館の受付で図書館カード（Library Visitor Card）を作成する必要がある。

⁷ <http://stmikes.utoronto.ca/kelly/rarebooks/mcluhan/default.asp>（2015年2月1日取得）

⁸ <http://fisher.library.utoronto.ca/mcluhan-library>（2015年2月1日取得）

⁹ <http://fisher.library.utoronto.ca/sites/fisher.library.utoronto.ca/files/mcluhanFA-june2014.pdf>（2015年2月1日取得）

フィッシャー文庫の利用には、さらに同館が発行する利用証が要る。両文庫とも閉架式のため、事前の請求手続きを要し、閲覧までに半日程度を見なければならない。両文庫は開館の曜日、時間帯とも異なるので、滞在が短い場合には待ち時間を有効に使えるよう計画を立てておくのがよい。両文庫の資料は当然、禁帯出だが、それぞれに複写のサービスが整備されている。ケリー文庫では、専属スタッフによる有料の複写のサービスが利用できる。同文庫の複写は一頁毎に課金されるシステムだが、既に電子化されているデータとそうでないものでは利用料金が異なる。正式な見積もりをメールで受け取った後、カードで決済できる。複写する量と時期にもよるが、今回は、申請からおよそ 2 週間で電子データ (PDF) をネット経由で受け取ることができた。他方、フィッシャー文庫には、閲覧室の外、受付の前にヘッドマウントカメラが設置されており、各自で撮影した電子データを USB メモリーで持ち帰れるようになっている。複写に料金はかからないが、一度に手元に置ける冊数に上限があり、また他の利用者もカメラを使用することから、閲覧と複写に相応の時間を見込まなければならない。ともあれ、これらの点を頭に入れておけば、両文庫とも、親切で有能なスタッフにより、快適かつ円滑に資料収集作業にあたれることだろう。

筆者にとって、5 日半の滞在期間は、初回としては十分といえる長さだった。ケリー文庫から入手した 67 タイトルの論文はまだその全てを精読しておらず、フィッシャー文庫で撮影した 200 超の写真データの整理も終わっていない。もちろん、一週間弱の滞在では両文庫の全資料を猟渉するのは不可能だ。特に MMLC の資料については、現物を手にページを繰るだけでも月単位の時間を要するだろう。今回は資料を一瞥したというのが関の山である。前記のとおり、一見の両文庫訪問で得た資料の一部を紹介し、整理の道筋をつけつつ次回訪問に繋げるのが本稿に与えられた役割である。以下、MMC, MMLC の順に、今回収集した資料の中から、筆者のこれまでの研究と関連の深いものを紹介し、その価値について少々の解説を加える。

2. MMC

前記のとおり、MMC の強みは公刊済みのマクルーハンの著作が網羅されている点にある。一連のタイトルを概観するだけで、著書や主要な論文で構成されてきた従来のマクルーハン像とは異なる形や大きさの像が結ばれてくる。主な著作を連ねてできるマクルーハン理解を一本の本流に喩えるならば、全著作書のリストは、本流に流れ込み、また本流から分岐する支流を加えた見取り図を形成する。全著作のリストの閲覧には、それだけでも研究上の意義が認められる。しかし、こうした見取り図には、支流の水量を測るための情報は描かれていない。実際に現物を手に取れる MMC は、情報を凝縮した見取り図に加え、それが捨象した支流の姿、さらに伏流の姿を目にできる場所だと言えるだろう。この点は、次に見る MMLC にもあてはまる。極めて多作だったマクルーハンの著作群には、時折、依頼によって書かれたと思しき貧困な作品が見られ、タイトルを挿げ替えただけの焼き直しの作品も散見される。これらに混じって、一見唐突であっても、ある種の構想の下で大きな流れに育つ可能性を想定できる作品が見つかることもある。両者を区別するには、現物にあたるに如くはない。

便宜的に 10 年毎に区切り、各区分で支流や伏流と呼ぶに値する流れの様子を紹介しよう。

1940 年代といえ、博士号を取得 (43 年) したばかりの駆け出しの英文学者が、アサンプション大学を経て、トロント大学のセント・マイケルカレッジに地歩を占め (46 年)、アカデミズムの階段を上り始めた時期にあたる。この時期の著作群を眺めると、ポー (Edgar Allan Poe, 1809-1849) やブレイク (William Blake, 1757-1827) についての論文¹⁰ などの英 (米)

¹⁰ (1944) “Edgar Poe’s Tradition”, *Sewanee Review*, 52: 24-33./ (1947) “Inside Blake and Hollywood”, *Sewanee Review*, 55: 710-715. * 資料には後者の出典が *Sewanee Review*, 50.4 と明記されているが誤りと考えた。

文学者として「真っ当」な著作に、広告に関する論文が混じっているのに気づく。1947年の「アメリカの広告」¹¹は、1951年の『機械の花嫁』(*The Mechanical Bride*)に先立つマクルーハンの広告論として拙著でも紹介済みだが¹²、広告への関心は、『機械の花嫁』を跨いで、1950年代前半の複数の論文につながっている¹³。漫画論¹⁴を含め、1953年から始まった『探究』(*Explorations*)誌での著述からは、ハイブラウな英文学者が、当代学生を理解という単なる教育上の便宜¹⁵を超えて、ローカルチャー研究者の顔で嬉々として活動をしていたのが分かる。

1950年代半ばからは、メディアの変化が引き起こす革命的な影響を歴史的に裏付けようとする論文や書評が目につくようになる¹⁶。並行して、電子(電気)技術の影響に言及しつつ、それに対処する方法を模索する論考も見られるようになる¹⁷。マクルーハンの場合、新しいメディアへの対処法は、

¹¹ (1947) “American Advertising”, *Mass Culture: The Popular Arts in America*: 435-442.

¹² Cf. 柴田 (2013b: 9)

¹³ (1952) “Advertising Magical Institution”, *University of Toronto Commerce Journal*: 25-29./ (1953) “Age of Advertising: The ads are a Form of Magic which have Come to Dominate a New Civilization”, *Commonweal*, 58.23: 710-715.

¹⁴ (1954) “Comics and Culture”, Ross M. (ed.), *Our Sense of Identity: A Book of Canadian Essays*: 240-246.

¹⁵ Cf. 柴田 (2013b: 6-7)

¹⁶ (1955) “The Oral Tradition: The Oxford Book of English Talk”, *Queen's Quarterly*, 41.4: 567-568./ (1955) “Historical Approach to the Media”, *Teachers College Record* 57, 2: 104-110./ (1958) “Electric Revolution in North America”, *International Literary Annual*, 1: 15-169./ (1959) “Printing and Social Change”, *Printing Progress: A Mid-Century Report*: 81-112./ (1960) “Electronics and the Changing Role of Print”, *Audio-Visual Communication Review*, 8.5: 74-83.

¹⁷ (1956) “The New Language”, *Chicago Review*, 10.1: 46-52.

新しい教育方略や教育環境への提言に収斂する傾向があるが¹⁸、この傾向は既に 1950 年代後半の論文に確認できる¹⁹。

さらに教育をキーワードにタイトルに概観すると、1940 年代初頭に始まり²⁰、1960 年代を経由して²¹、1970 年代半ばに至る流れが浮かび上がる。ここで言う教育が、初等教育のみならず²²、高等教育、正確には大学における教養教育²³を含むことは注目してよいだろう。教養教育への言及を、単に大学における教育方略の指針を得るための実践的な要求に還元してはならない。リベラルアーツ（特に三科）間の興亡から時代の変化を読み取ろうとした学位論文²⁴の関心が、生涯継続していたものと解釈すべきである。1970

¹⁸ (1977) with McLuhan, E. & Hutchon, K. *City as Classroom*, Book Society of Canada, Toronto.

¹⁹ (1957) “New Strategy and New Languages for the Classroom”, *The O.E. C.T.A. Review*, 13.1: 17, 55.

²⁰ (1943) “Education of Free Men in Democracy: the Liberal Arts”, *Studies in Humour of St. Thomas Aquinas*, 1: 47–50.

²¹ (1959) “What Fundamental Changes Are Foreshadowed in the Prevailing Patterns of Educational Organization and Methods of Instruction by the Revolution in Electronics?”, Smith, G. H. (ed.), *The Race against Time: New Perspectives and Imperatives in Higher Education, The Proceeding of the Fourteenth Annual national Conference on Higher Education*: 176–182./ (1960) “New Media and the New Education”, *Canadian Communication*, 1.1: 48–55./ (1967) “New Education”, *The Basilian Teacher*, 11.2: 66–73./ (1967) “The Future of Education: The Class of 1989”, *Look*: 23–25.

²² E.g. (1967) “New Education”.

²³ E.g. (1943) “Education of Free Men”./ (1961) “Humanities in the Electronic age”, *The Humanities Association Bulletin*, 12.1: 5–14./ (1974) “Alternatives to the University”, *University of Toronto Bulletin*.

²⁴ (1936) *The Classical Trivium-The Place of Thomas Nashe in the Learning of his Time*, the Cambridge University Doctoral Dissertation = (2006) *The Classical Trivium-The Place of Thomas Nashe in the Learning of his Time*, Gordon, T. (ed.), Gingko Press.

年にキケロを取り上げた論文が書かれていることも²⁵、これを傍証する。ここに、マクルーハンの思想を人文学 (humanities) から読む可能性が認められる。

マクルーハンがメディアの影響を測るにあたり感覚比率の議論を展開したこと、そして、リベラルアーツ間の比率と感覚間の比率を並行して語ったことは既に知られている²⁶。『グーテンベルクの銀河系』(*The Gutenberg Galaxy*, 1962) と『メディアの理解』(*Understanding Media*, 1964) という二冊の主著の二冊が出版された時期に感覚比率の議論を集中して行っている点も首肯できる²⁷。感覚比率の議論が1960年代後半から左右脳局在論の応用に置き換わることも既知の事実である²⁸。MMCの資料からも、最晩年の研究課題が脳研究に移行していたことが追跡できる²⁹。

大学が公表するリスト以外にも行き届いたマクルーハンの文献目録³⁰がある現在、タイトルのみになんかを語らせるだけであれば、トロントを訪れる必要はない。マクルーハンの思想を文献から読み解く作業に取り組む学生には、現物を手に、文章に目を走らせるときに得られる体験の意味を繰り返して強調しておきたい。本稿の役割は、MMCの資料を閲覧した際に開示された読み筋を列挙するところにある。もちろん、本稿には、速やかに資料の精読の作業と、読み筋の正当性を証明する作業が続かなければなら

²⁵ (1970) “Cicero and the Renaissance Training for Prince and Poet”, *University of Toronto Renaissance and Reformation Colloquium, Victoria University Center for Renaissance and Reformation Studies*: 38-42./ (1970) “The Ciceronian Program in Pulpit in Literary Criticism”, *Renaissance and Reformation*, 6.13: 3-7.

²⁶ 柴田 (2013b: 58, 66-67, 80-94)

²⁷ (1961) “Inside the Five Sense Sensorium”, *Canadian Architect*: 49-54.

²⁸ 柴田 (2013b: 145-148)

²⁹ (1978) “The Brain and Media: The ‘Western’ hemisphere”, *Journal of Communication*, 28.4: 54-60.

³⁰ ゴードン 宮澤訳 (2001: 189-214)

ない。

3. MMLC

MMCの資料が本流に支流や伏流を書き加える作業に役立つとすれば、MMLCの資料は、流れに水を供給した水源を探す作業に貢献してくれる。水源には、目に見える大きな本流をつくり出した源（水源A）だけでなく、本流に育たず、結果的に支流や伏流に留まった流れの源（水源B）を含む。

本流との強い繋がりを仮定し、繋がりが証明できれば、当該文献には水源Aとしての評価を下せる。マクルーハンの思想の輪郭を描き出す作業は、水源Aを特定する作業から始まり、描き出された輪郭は、別の水源Aを特定することで裏書される。マクルーハンの全体像は、マクルーハン自身の著作と水源Aとの往復によって描き出される河川図ということになるだろう。水源Aからの水を集めない流れは本流と呼ぶに値せず、また、新たな水源Aの発見によって本流の姿は書き換えられなければならない。

マクルーハンの思想を敷衍しようと試みる場合には、水源Bに注目すべきである。現実の河川には本流と、本流の水源に加えて、本流から枝分かれた支流や、枝分かれた後、途中で途切れてしまう伏流もある。思想の支流や伏流に水を供給する水源Bの特定は、水源Aの特定と並行して進む。水源Aの特定が思想の全体像を描出する作業に関連するのに対し、水源Bの特定は本流に育たなかった流れの中から本流に比肩する可能性を秘めた流れを選び出し、その可能性を展開する作業に繋がっている。いわば、河川図に描かれていない川筋を、著者が遺した資料に基づいて加筆する作業と言えよう。

水源Bの見極めは、マクルーハン自身の著作に遺されたアイディアのうち、展開が成就しなかったものを特定し、それを敷衍する上で欠かせない。ここで「敷衍」を、文献学的作業を重視する立場からあえて狭い意味で使用したい。今も昔もマクルーハンの作品から着想を得て書かれた文献は枚挙に暇がなく、それらの価値を認めるに吝かではないが、加筆された流れ

が潜在していた流れと全く交差しないならば、加筆による成果をマクルーハンに帰属させるのは適当でないと考えからである。つまりマクルーハンから得た着想には、マクルーハンに帰属させるべきものがある一方、マクルーハンに帰属させるべきでないものもある。マクルーハンの思想とそこから得た着想の間には必ず飛躍が存在し、その飛躍を埋めるのが文献Bなのである。文献Bを欠く着想は、オマーージュにはなっても、アイディアの敷衍ではなく、その成果は読者に帰属させるべきものなのである。水源Bとの繋がりがあって初めて、敷衍の名の下で河川図に流れを書き加え、それを展開していけるのである。

以下、MMLC から、水源Aに関わるものとして「エクステンション extension」についての資料を、水源Bに関わるものとして「生態心理学 ecological psychology」についての資料を紹介したい。

「エクステンション」関連資料

マクルーハンとホール (Edward T. Hall, 1914-2009) との間に「エクステンション」の先取権論争(着想の先後をめぐる論争)があったことはよく知られている。両者の論争は、『グーテンベルクの銀河系』の公刊を起点に始まり、フラー(Richard B. Fuller, 1895-1983)を巻き込みつつ、1960年代後半のマクルーハン研究の最も熱い論点の一つになった。マクルーハンの死後、その弟子たちとホールの間で手打ちが成立してからも、「エクステンション」に注目したマクルーハン解釈は蓄積されてきた。拙著では、「エクステンション」の概念がマクルーハンの理論形成に最も重要な役割を果たしたことの論証³¹を通じて、弟子たちとホールの間の手打ちがマクルーハンにとっては極めて不当なものであることと「エクステンション」に関する先行研究がすべて不十分であることを明らかにした³²。

MMLC には、論争中のホールから送られてきた『文化を超えて』

³¹ 柴田 (2013b: 55-130)

³² 柴田 (2013b: 170-197)

(*Beyond Culture*, 1976) の見本³³ が保存されている。ホールはこの著書で「エクステンション」の帰属が自分であることを明言しているが、これは、マクルーハンが『グーテンベルクの銀河系』の改訂版で、「エクステンション」がホール、およびフラーに帰属しないことを記した註を加筆したことへの対抗措置だった。ホールは公刊前の見本をマクルーハンに送りつけ、論争の継続を宣言したわけである。MMLC 所蔵の見本には、ホールの言い分に対する反論がマクルーハン自身によって書き込まれている。本文中に断続的に現われる書き込みは、マクルーハンが同書を精読したことをうかがわせる。そして、見返しの上半分と裏表紙の全面への細かい書き込みからは、マクルーハンがすぐさま同書への反論を用意したことが分かる。

発見的な観点からして『文化を超えて』の見本よりも興味深いのは、「エクステンション」に関する先行研究の底本が確認できたことである。やはり結論のみ言うと、先行研究のほとんど全てが「エクステンション」の起源を突き止めることに注力しているが、その大半が一つまたは二つの起源に辿り着いたことを以って考察を終えている。拙著では、まず、マクルーハンが使用した「エクステンション」には三つの意味があることを、それぞれの意味、および概念の起源とともに解明した。その上で、三つの意味の組み合わせによってマクルーハンの思想の理論的部分（「探索」の原理）が説明できることを論証した。この解明と論証の作業によって、先行研究の多くが誤った起源に依拠した誤読に陥っていることが判明したが、何が誤読を誘発したかは判然としなかった。より正確に言えば、「エクステンション」の起源と見做される「原典」が起源と呼ぶには中途半端な時代のものであったり、いくつもの意味を併せ持つ「エクステンション」をあえて単一の意味で読もうとする強い傾向が見られることが理解できなかったのである。誤読の原因の一端が、MMLC 所蔵の「原典」にあった可能性は否定できない。今回 MMLC で、先行研究が唐突に引用し、そこに書かれた内容に全幅の信頼を寄せた「原典」のいくつかが発見できた。

³³ 請求番号：mcluhan f 00091

まず、ホームズ(D. Holmes, 生没年不明)らの研究(Holmes & Zabriskie, 1964)に「エクステンション」の発案者として名があがるマクドゥーガル(William McDougal, 1871-1938)について。ホームズらは、著書を特定せず、マクドゥーガルの思想がマクルーハンの使う「エクステンション」の初出であると述べた。ちなみに、「エクステンション」の系譜を繙けば、マクドゥーガル以前に伸びる複数の思想の流れを確認できるし、マクドゥーガルの「エクステンション」をその流れの一つの中途に位置づけることもできる。したがって、マクドゥーガルの思想はいかなる系譜の起源でもないが、マクルーハンを特定の系譜に導いた可能性は残る。文献が特定できない以上、検証の作業は、マクルーハンが参照したと考えられる著書を風潰しにすることになる。これまでに、マクドゥーガルの複数の著書で「エクステンション」の語を確認し、そのいずれも、マクルーハンの着想の源とは認められなかった³⁴。今回 MMLC で、『心理学：人間行動の研究』(*Psychology: the Study of Human Behaviour*, 1921)³⁵と『社会心理学入門』(*An Introduction to Social Psychology*, 1923)³⁶の二点の所蔵を確認した。『社会心理学入門』については、独自に入手したテキストで「エクステンション」の語が登場することと、同書の「エクステンション」の意味がこれまで検証した文献に登場する「エクステンション」の範囲を出ないこと、したがって、マクルーハンが依拠した「エクステンション」である可能性が薄いことを検証済みである。今回、マクルーハンが使った MMLC 所蔵のテキストを閲覧して、本文に複数の傍線が引かれているのが確認できた。そして、傍線のうち「エクステンション」に懸かるものが一つもないことが分かった。傍線がマクルーハンの関心の焦点を読み取る手がかりだとすれば、少なくとも同書に登場する意味での「エクステンション」がマクルーハンの気を惹かなかったことが推定できる。マクドゥーガルを「エ

³⁴ Cf. 柴田 (2013b: 184)

³⁵ 請求番号：mcluhan 02333

³⁶ 請求番号：mcluhan 01692

クステンション」の発案者とする説は、MMLC の資料の検証を経てより脆弱になったと言えよう。

「エクステンション」の数ある議論の中でキャヴェル（Richard Cavell, 生年不明）の『空間におけるマクルーハン』（*McLuhan in Space*, 2002）での指摘は出色である。同書でキャヴェルは、フロイト（Sigmund Freud, 1856-1939）の『文明とその不満』（*Civilization and its Discontents*, 1930）が「エクステンション」の起源だと主張している。実際、MMLC には、同書³⁷を含めて7冊のフロイトの著書があり、そのいずれにも多くの書き込みが見られた。さらに、フロイトの関連書籍が4冊確認できることから、マクルーハンがフロイトに一定以上の関心を持っていたことが分った。しかし、マクドゥーガルと同じく、フロイトの「エクステンション」も、過去に伸びる思想の系譜の中途に位置づけられるため、それを起源と認めることは不可能である³⁸。

キャヴェルの記述からは、単純な操作を加えるだけで三つの「エクステンション」を分節することができる。三つの意味を分節した議論が皆無であることを考えると、本人の自覚の有無に関わらず、キャヴェルによる考察には相応の評価が与えられよう。しかし、分節の作業が不完全に終わったために、三つの起源を特定するには至らなかった^{39,40}。なぜ分節の作業が

³⁷ =Freud, S. (1930 (1962)) *Civilization and its Discontents*, W. W. Norton and Company, New York.

³⁸ キャヴェルの考察の特異性は、フロイトを経由してデカルトに遡る系譜に言及したところにある。確かにデカルトの思想は「エクステンション」のうち、「延長」と訳出すべき概念の有力な起源である。ただし、フロイトの思想から抽出できる「エクステンション」は、デカルトとは別系統の「外化」の概念であり、両者を繋ぐ説明には無理がある。「拡張」を含め、三つの系譜の候補を列挙した唯一の先行研究である点は強調されてよいが、意味の分節が不完全なことが、起源を特定する際の障害になったと考えられる。詳しくは、拙稿（柴田（2013c））を参照のこと。

³⁹ 柴田（2013b: 193-194）

⁴⁰ 柴田（2013c: 104-114）

途中で挫折したのか、理由は定かでないが、仮にキャヴェルが MMLC の資料を閲覧していたと考えると、フロイトに関する蔵書は、分節を促進するよりも足かせになった可能性がある。

著者たちがマクルーハン所蔵の資料を閲覧したか否かは、本人が明言する以外に確かめようがない。仮に MMLC、または MMLC に先立つ蔵書を閲覧し、そこで発見した文献を根拠に読解に挑んだとすれば、「エクステンション」をめぐる議論は、蔵書を文献とすることが諸刃の剣となりうることを教える。蔵書は、それを所蔵した人物の思想を理解する鍵になる一方で、理解を誤った方向に誘導する危険を秘めている。水源Aの候補の発見は、起源を辿る作業に安易に終止符を打たせ、概念の多義性を無視させる原因に転化しうるのである。

もちろん、MMLC には、「エクステンション」の三つの意味を分節する際の鍵となる文献も確認できた。マクルーハンは、セリエ(Hans H. Selye, 1907-1982)の医学思想を経由して、三つの「エクステンション」のうち理論形成の核になった「外化」の概念と出会う⁴¹。セリエは、『探究』誌に複数回投稿した人物であり、マクルーハンの主要な著書では文献表に必ず名前が上る人物でもある。セリエ自身もその主著でマクルーハンを引用していることから、両者の交渉は公然の事実であった。この公然さ故に、かえってセリエの著作を文献Aとして吟味する作業が等閑視されてきたのだろうか。セリエとの関係でマクルーハンの「エクステンション」を論じた文章は管見にして知らない。今回、セリエの『現代社会とストレス』(*The Stress of Life*, 1956)がMMLCにあったことを付言しておきたい。

「生態心理学」関連資料

心理学を齧った者なら、生態心理学と聞けば、それを標榜する二つの学派がすぐに思い浮かぶはずだ。「行動場面 behavior setting」を中心概念に場所や主体に固有の行動を観察、記録したパーカー(Roger Barker, 1903-

⁴¹ 柴田 (2013b: 89-95)

1990) の流れを汲む学派を一つ目とすれば、二つ目は、それ自体では無意味な「刺激」に代わり、環境に実在する「情報」の概念をもとに知覚と行為の循環を解明したギブソン (James J. Gibson, 1904-1979) の学派ということになるだろう。今日では、ほぼ同時代に別の場所で発生した二つの学派をジェイムズ (William James, 1842-1910) の思想を文脈に関連付けた労作⁴²を読むこともできる。二学派の親和性を強調する姿勢には全面的には賛同しかねるが、両者が通底する点に関しては異論ない。

複数のメディアが構成する状況を環境と見做し、環境が人間に及ぼす影響を記述しようとしたマクルーハンが、環境をキーワードに構想された生態心理学に興味を抱いたとしても不思議はない。実際、晩年 (1976 年) の作品では、バーカーの名前をあげて生態心理学の将来性に言及している⁴³。マクルーハンが環境からの影響を記述する際にマクルーハンが身体論に依拠した点、およびギブソンが「延長」の意味の「エクステンション」を積極的に使い、その意味を更新した点⁴⁴に鑑みて、筆者にはギブソンへの言及があつて当然と思われた。そして、筆者にとって、ギブソンの生態心理学は、マクルーハンの思想を敷衍する理論の最も有望な候補だった⁴⁵。にもかかわらず、これまで公開されたマクルーハンの著作から、ギブソンへの言及を見つけることができなかった。

マクルーハンの思想とそこから得た着想の間には飛躍と呼ぶべき遠さがあり、飛躍の距離を埋める文献がない場合、その着想をマクルーハンの敷衍と呼ぶのが適当でないことは既に述べた。今回、MMLC でギブソンに関する資料が見つかった。

MMLC の蔵書で唯一ギブソンの名前を確認できたのが、クリステンセン (C. M. Christensen, 生没年不明) が 1974 年 3 月 26 日付けでマクルー

⁴² Heft (2001)

⁴³ McLuhan (1976: 263)

⁴⁴ 柴田 (2013b: 75-80)

⁴⁵ 柴田 (2008), 柴田 (2013a)

ハンに送った封書⁴⁶である。封書にはギブソンの論文⁴⁷の表紙のコピーが送り状とともに封入されていた。送り状からは、まず、クリステンセンがオンタリオ教育研究大学(The Ontario Institute for Studies in Education)の応用心理学部(Department of Applied Psychology)の学科長(Chairman)であることが分かる。同大は、トロント大学に属する大学院大学の OISE の前身と考えられる⁴⁸。本文の「先日のランチのときにお話したギブソンの論文のコピーをお送りします」の他に有効な情報になりうるのは、右上済みの各三語程度の三行の走り書きのみである。受取人以外に手紙に走り書きをする者はおらず、またクリステンセンの筆跡やその他の資料に残る筆跡と比較しても、走り書きの主はマクルーハンと考えて間違いない。一行目はかろうじて「ambiguity 3」までが特定できる。二行目は冒頭の「6」以外は判読できない。三行目については冒頭の「8」と末尾の「Touch」の判読が可能である⁴⁹。

該当するギブソンの論文の内容を簡単に説明しておこう。「感受性の有用な次元」と題する同論文には「刺激作用 stimulation」の語が使われており、ギブソンがこの段階で後期の「情報」の概念にたどり着いていなかったのが分かる。また、感覚様相を個々の感覚器官に帰属させるのではなく一つの系として捉え、さらに運動系との関連を着想しているところからは、近刊の二冊目の著書『知覚システムとして考える諸感覚』(*The Senses Con-*

⁴⁶ 請求番号：mcluhan pam 00604

⁴⁷ =Gibson, J. J. (1963 Jan.) “The Useful Dimensions of Sensitivity”, *American Psychologist*, 18: 1-15.

⁴⁸ <http://www.oise.utoronto.ca/oise/Home/index.html> (2015年2月1日取得)

⁴⁹ 本学部英米文化学科の米坂スザンヌ教授に見ていただいたところ、加えて、二行目に「skin as age」と思しき字列があるとのことだった。各行にある数字は、ギブソンの論文の頁番号と対応している蓋然性が高いが、当該論文については、現在、アンソロジーに再録されたもの以外手元にない。早急に原著を入手し、対照を手始めに判読作業を進めたい。

sidered as Perceptual Systems, 1966) の骨格が出来上がっていたことが読み取れる。

「先日のランチ」で何が話され、マクルーハンがギブソンの何に関心を持ったかは、この資料だけでは分からない。マクルーハンが感覚間のバランスの変化によってメディアの影響を記述しようとしたことを想起すれば、諸感覚をシステムとして統合するギブソンのアイディアは、マクルーハンの関心事の有力な候補になるし、感覚・知覚系と運動系の連関を図示する際にギブソンがフィードバックモデルを使用しているところは、同じくフィードバックモデルを出発点に身体とメディア環境を考えたマクルーハンの関心を惹いてもおかしくない⁵⁰。走り書きの数字が論文の頁を記したものであるとすれば、ランチでかなり具体的な内容が話されたと考えることもできる。他方、封入された表紙のコピー以外に MMLC でギブソンの資料が確認できなかった以上、マクルーハンが結局論文を読まなかった可能性も排除できない。ギブソンの論文のうち 1963 年という理論の発達途上にある一本が 1974 年のランチの席で紹介された理由を含め、いずれも推測の域を出ない。

現段階で何らかの結論を導き出そうとするのは早計であろう。一つ確かなのは、マクルーハンが 1970 年代半ばのほぼ同時期に二人の生態心理学者に興味を示し、その一人がギブソンだったという事実である。MMLC で発見できた資料の意味を特定する作業と並行して、いささかの自信を持ってギブソンのアイディアでマクルーハンの理論を敷衍する作業を続行したい。

おわりに

街中にありながら大学らしい厳かさと活気が感じられる構内の東隅で質

⁵⁰ Cf. 柴田 (2013b: 80-89)

素なコーチハウスを目にすれば、マクルーハンの学徒なら相応の感慨があるだろう。

トロントの街の北側に位置する大学の風景は、当然、ニューヨーク郊外の山間に広大なキャンパスを誇るコーネル大学のそれと異なる。変化の中に変わらない何かがあれば、聖地巡礼も無意味ではない。研究の中心が他所に移動しようとも聖地と呼べる場所であれば、そこを訪れない理由はない。トロント大学は、ギブソンの生態心理学を学ぶ者にとってのコーネル大学やインド哲学を学ぶ者にとってのインドと同様、聖地の環境を保っている。

アイコン的人物の資料を大学が保存し、公開する作業は、経営的な観点からではなく、知の継承への関与の点で賞賛に値する。トロント大学がマクルーハンの学徒にとって聖地であるのは、単なる顕彰以上の、知の継承の観点からマクルーハンの資料を管理し、かつ最大限に公開の便宜を図っているからに他ならない。

データ利用の規約上、本稿で取り上げた資料の画像を掲載するのは差し控えた。説明の不十分なところの補足を含め、次稿では本稿で紹介できなかった資料を紹介したい。

今回のトロント訪問を期して擱筆する。

参考・引用文献（脚注で紹介したものを除く）

- Cavel, R. (2002) *McLuhan in Space*, University of Toronto Press, Toronto.
- Gibson, J. J. (1963 Jan.) "The Useful Dimensions of Sensitivity", *American Psychologist*, 18: 1-15.=(1982) "The Useful Dimensions of Sensitivity", Reed E., Jones. R. (eds.), *Reasons for Realism, Selected Essays of James J. Gibson*, Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers, Hillsdale, New Jersey, 350-374.
- Gordon, W. T. text & Wilmarth, S. illustration (1997) *McLuhan for Beginners*, Writers and Readers, New York.=(2001) 宮澤淳一訳『マクルーハン』筑摩書房

Heft, H. (2001) *Ecological Psychology in Context: James Gibson, Roger Barker, and the Legacy of William James's Radical Empiricism*, Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers, Mahwah, New Jersey.

McLuhan, M. (1976 Spring) "Misunderstanding the Media's Law", *Technology and Culture*, 17.2: 263.

柴田崇（2008）「20 世紀におけるメディアウム概念の成立と変容——マクルーハンとギブソンの比較研究——」東京大学大学院教育学研究科博士論文

柴田崇（2012）「ハイダーとギブソンのメディアウム概念」『生態心理学研究』5：15-28.

柴田崇（2013a）「メディア研究の生態学的転回」『知の生態学的転回 第二巻』東京大学出版会：233-257.

柴田崇（2013b）『マクルーハンとメディア論：身体論の集合』勁草書房

柴田崇（2013c）「"extension" をめぐるマクルーハン研究の検証——リチャード・キャヴェルの『空間におけるマクルーハン』について」『新人文科学』10：86-119.